



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑪～

ちからのカタチ 3



松岡園子

私が病気を抱えた母と 2 人暮らしになった中学生時代の自分の体験をお話しさせていただく時に、周りの同級生と何が違っていたのか、振り返って考えてみたことをご紹介しますことがあります。

その中の一つに、自分で選択・決断する場面が多かったとお話しすることがあります。それは、同級生のものとは少し違った形の選択・決断でした。

中学校に入ると、部活動に所属することが当たり前だった 1990 年代。周りの同級生は、自分が興味を持った好きな部活を選択します。でも私は、調子の悪い母が家にひとりでいることを考えると、部活なんてしている場合ではないと考え、部活に入らないことを選択・決断しました。当時、楽器の演奏に興味があり、友達が誘ってくれた吹奏楽部に入りたいという思いもありましたが、放課後や土日の練習で家を空けることが多くなることを考えると、どうしても入る気にはなれませんでした。部活に入ることが当然という考え方の時代でしたので、学校の先生や友達から「なぜ部活に入らないのか」と訊かれたり、高校進学の内申にひびく、どの部活でもよいから入りなさいなどと言われることもありました。

同級生の選択は「どの部活に入るか」で、私の選択は「部活に入るか入らないか」です。でも、周りの声に合わせて部活に入り、家を空けている間に母に何かあれば、対応するのは私です。問題があれば、大変な思いをするのは私なのだから、周りの声に合わせてばかりもいられません。周りから見れば、変わった子ども、頑固な子どもだったかもしれませんが、私は部活に入らずに中学時代を過ごしました。大人になって余裕ができ、やりたければ趣味としてできるし「今は」やめておこうという思いでした。

中学校で周りの同級生と同じ経験をすることよりも、周りとは違う選択・決断をしてでも、病気の母と一緒に暮らしたい気持ちの方が強かったのでしょう。だから今、部活が「できなかったこと」よりも、母と暮らすことが「できたこと」の方が、私の心に強く残っているのだと思います。同じように、修学旅行にも行きませんでした。

これは当時の私の考える優先順位がそうだっただけであり、他の人ならまた別の優先順位があり、どちらが良くて、どちらが悪いというものでもないと思います。その人の考える優先順位に合うように環境を調整していくことができれば、幸せを感じやすいのだということではないでしょうか。私のことと言えば、どうしても部活に入りたいという強い思いがあったのなら、そうできるように周りとの協力し、環境を調整していくことが必要だったのだと思います。そのために母と離れて暮らすことが必要なのであれば、それも選択肢の 1 つになるということだと思います。

私の 10 代、同級生と何が違ったか。その 1 つは自分で選択・決断する場面の多さですが、それは私の場合たいてい、周囲の「当たり前」に「NO」を言う選択・決断をすること、他の人とは違う選択をすることでした。その環境下ではそうするのが当然と思われていることを断り、自分ひとりでも周りとは違う選択をすることで、それを周りからとがめられても気にせず、貫く練習、自分が納得できる環境をつくり、幸せを感じる練習をしていたような気がします。部活や修学旅行の例で言うと、私が選択する事柄は、世間一般の考えからすると基準ラインから脱落する方向への選択で、それは不幸なことであるという周りの認識があったのではないのでしょうか。でも、脱落しているのかどうかは後になってみないとわからないことですし、不幸かどうかは私自身が決めることです。

そうは言っても、10 代の子どもの考えていることです。やはり周りの大人の人の言うことの方が正しいのではないかと、自分の決めたことに自信が持てなかったり、不安になります。いつも前を向いて突き進んでいくことができるわけではなく、ふと弱気になることだってあります。そんな時、何に支えられていたかという、「先生に言われても気にしんとき」と言いながら一緒に帰ってくれた友達や、友達のお母さんです。私の選択を「それでいいやん」と受け入れ、そばにいてくれたから、不安だったけれど前に進むことができたのだと思います。